

ふるさととの歴史

先史時代の銚子

Ⅱ主として、粟島台遺跡と

余山貝塚を中心とした考察Ⅱ

大木 衛

一、石器時代の銚子は島嶼

銚子は、関東平野の最東端に、半島状となって太平洋に突き出ている。東京を中心として、関東山地の円形の外郭の一部といえる。地質的には、千葉県内、銚子半島のみが、古生代・中生代そして新生代まで、各地層の岩石とそれに伴う化石が産出しており、特徴ある地といえる。

特に、中生代の化石であるアンモナイトやトリゴニアなど、豊かに採取されており新生代の鮫の歯や鯨の耳石なども発見されている。

火山活動があったことは、安山岩等が川口地先や長

崎海岸で、それを示す岩石を見ることができるといえる。

この時代は、岩石の状況から、太平洋に浮かぶ島状な地であったことは疑いがない。

やがて現在の陸地と同様となったのは、新生代の最も新しい時代となった、洪積期といえる。銚子地方の台地には、関東ローム層と名付けられている赤土のみられる洪積世台地であり、この堆積が、屏風ヶ浦の海岸などで見ることができるといえる。詳細に観察すると、赤土も上部と中・下部と分化され、層中に黒色の帯が見られるのは、赤土として降灰が止った時代に草木が繁茂し、やがて腐蝕土となったことを物語ってくれる。更に赤土内の土壌分析や内容物のシルトやパミス(浮石)の分析によっても、時代区分が行われている。

これらの赤土は、関東山地の赤城山や榛名山、箱根山等の火山活動による噴火で、火山灰が堆積してローム層となっている。この赤土の下部の土地は、海上より出た場所に積もったわけであるから、水辺や低地などには、赤土をみることはできない。

最近発見された旧石器時代の遺物の多くが赤土の中
から発見されていることから、すでに銚子地方にも
人々の生活跡が所在したことといえる。

この時代が約五万年前頃とされ、日本はユーラシア
大陸の東岸にあり、やがて地殻の大変動により、大陸
から分離し、太平洋上に火山列島として、サハリン・
本州・四国・九州・沖縄・台湾と続いている。

ユーラシアの一部であったことは、日本をはじめ千
葉県各地から発見される。ナウマン象やマンモスの化
石の発見によっても理解される。(マンモスの化石は、
香取郡から発見され大根根博物館に展示)

銚子でも昨年、三崎遺跡で、旧石器時代の生活物で
あるユニットが発見され、昭和三十年代には、屏風ヶ
浦台地からも旧石器が表面採集されている。次の縄文
時代の後期頃まで銚子は西小川町から名洗にかけて、
対岸の粟島台遺跡のある南小川町、高神地方とは分離
された島状であったことが、先史地理的な考察からう
かがわれる。

現在公正市民館から、妙見町と小川町を經ている
「滑川」なめりがわ＝通称ドンドン川は、その当時には海水が入
り込み、やがて湿地となり、細流となって今日的な地
形といえる。

粟島台遺跡の東側の小溺谷的な地に、縄文前期に比
定される、鹹水かんすいに棲息する貝が主体をなす貝塚もそれ
を裏付けている。

粟島台の西側の河岸段丘的な地は、遺跡の入江とし
て活用する地であることは想像することができるといえる。

縄文時代の中期頃となると、波崎から鹿島方面にか
けて開口した、古東京湾も地殻と沿岸流、利根川とな
る上流河川の土砂等のため遂次にせばまり、安是あぜの湖うみ
となって、やがて現在に近い地形が構成され、その次
の縄文後期から晩期にかけて、余山貝塚が営まれ、砂
丘として台地から低地へ進出し、石器時代の最末期の
人々の生活跡となっている。台地上の集落から、原始
的な漁業を主とする地として、比較的長年月にわたる
季節的な前進拠点から次第に、浅瀬の貝や小規模な漁